食べる人びと 270
カリカチュアに見る食の姿

山本謙治・監修 岩田ユキ・漫画『ようこそ、自由の森の学食へ』

石子　順
日本漫画家協会理事

学生食堂はおいしい

学生食堂の食事はおいしいという評判を聞く。そういうことが話題になると，筆者も，教えていた和光大学の学生食堂のおいしかった日替わり定食の味を思い出す。

この，岩田ユキ『ようこそ、自由の森の学食へ』は「ハヤカワミステリマガジン」の早川書房が出した。埼玉県にある自由の森学園（通称ジモリ）の学食の食事を作る苦労と工夫を描く。

栄養学を研究する大学院生・中垣ユイは，病院食を学ぶために病院で研修中に，患者が昼食を残すのを見て，どうしてですかと聞いた。「食べたいものが一つもない」「だってまずい」という言葉にグサッときた。１週間の研修が終わって自分の大学に戻って学食で，食べてもらえない，病状に合わせた献立は作れるけど，…一人一人の味の好みまで聞いてあげるのは無理…などと言っていると，「そんなことないさ」奇跡の学食があると後輩の野倉に言われた。

ユイは自由の森学園“ジモリ”の学食に行った。日替わり定食を食べた。カジキのムニエル，ポテトサラダ，みそ汁に雑穀米。うまい。「コレ作ったのは誰ですかーっ!?」と言ってしまった。ユイはここの食生活部の藤谷チホ子さんに，厳選した野菜，手作りの保存食，こだわりの調味料を見せてもらい，残食の少なさを知った。生徒がごちそうさま，うまかったと声を掛けてくる。目がキラキラ美しい。「ここで働かせてください」と頼みこんだ。

たちまち引きこまれてしまう始まりに，中垣ユイの熱心さが，これからどう鍛えられていくのかと気になってくる。

寮生活の食事は

“ジモリ”には学生寮があり，いろいろ問題を抱えている子どももいる。食事にかまけて不満をぶつけてくる子や，アトピー性皮膚炎のため食事制限を受けている子など，いろいろである。

子どもの状態に合わせて食事が作られていく。ユイは子どもの注文にとんがって，「どう指導していったら…」と言うと，藤谷さんから「指導はできないわ」と言われ，こわい顔になっていると注意される。

寮生140名分を毎朝調理する。バイキング形式の朝食を，「何か食べたい」という気持ちに弾みをつけていくような食事を作る調理人たち。「おいしかったです」のひと言でうれしくなる。

ユイはなかなか子どものハートをつかめない。アレルギーの少女のためによかれと思って調べたことが，その子のためにならないようなことに先走っていたりする。

©山本謙治・岩田ユキ／早川書房

好き嫌いを放っておくのは…と心配すると，先輩の松田さんに「あの子の歩幅で成長していくのを一緒に見守りましょう」と言われてしまう。

食生活部を親たちが手探りで運営してきた30余年。その進化してきたことのさまざまな取り組み。パン定食，力うどん，カレー，ピクルス。「子供達がしっかり食べてくれたから　ここまで立ち止まらず進化してこられたわ」と感謝する藤谷さん。

ここに描かれたのは，子どもの注文にユイと，先輩の波野さんとが手を加えて新しく作りあげた希望のハヤシライス。おいしそうな形をとらえつつ，それを食べる子どもたちをズラリと並べて描いた。その食べる反応をカット割りにしてそれぞれの個性を感じさせるところが見事だ。子どもがおいしいものを食べる瞬間がある。「食べるのを嫌いにさせたら負け！」「あの子たちが笑って食ってんなら…まずは」「俺らの勝ちだ」ユイと波野がバチッと手を握る。じんとさせる。

寮の食事という身近な相手の食欲をそそり，食べさせて元気にして，成長させていくための大切な食事作り。

３年生の巣立ちの季節。卒寮パーティーとして，最後の夕食を寮生全員で祝う会が開かれる。卒業生たちの食べたい希望のものを注文させて，１位となった特別メニューを出す。ユイが実行担当になった。注文はグラタン。人手のない夜に130食も作るのは無謀ですと言われながら，それを先輩たちみんなの力が集まって乗り切って作った感激，子どもたちにありがとうと言われる感動。締めくくりはユイの成長。「ここはあなたの食卓です」と扉を開いたラストシーンに，ごはんを出すことの大切さが染みてくる。

ISSN 1882-8140 Vol.68 No.754　平成29年9月1日発行（毎月1回1日発行）　第68巻第9号　昭和29年8月23日　第3種郵便物認可

こころとからだのけんこう

学校給食

9
September 2017
Vol.68 No.754

●特集

生活リズムを考える

食べて学ぶ郷土の食文化

きょうの給食なーに?「福島県」